H19 年度　修了時アンケート結果

①基礎データ

【二年間の総合評価について】

＜教育内容＞

本専攻が提供した教育内容について高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は 64%であった。多くの学生は、概ね満足しているとしているものの、勉学環境（「事務面の見直し」「ハード面の充実余地あり」）、教育運営上の問題（「授業時間が短い」「人数が多い」「集中講義への不満」）、科目の問題（「MOT 科目不足」「カリキュラム体系の改善」）などについての問題点があげられている。

＜カリキュラム体系＞

本専攻が提供しているカリキュラム体系について高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は 68%であった。本専攻が重要視する基礎的科目・実践的科目に加えて、より応用的な科目やアカデミックな科目を求める傾向も見られる（「経済学府の教員の授業を増やして欲しい」「奥行きの体系化」）。また、欧米のビジネス・スクールにあって本専攻にはない科目（「リーダーシップ」「ロジカルシンキング」「リアルオプション」「マーケティング科目の幅」「ホスピタリティーマネジメント」「金融工学」）を増強して欲しいという期待も見られる。

＜教育方法＞

本専攻の教育方法について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は、59%であった。具体的な要望としては、「複数科目共通のケース・スタディー」「ゲストスピーカー講演」「実践演習」「ケースメソッドの授業」などを増強して欲しい等があげられる。

＜授業環境（設備等ハード面）＞

本専攻の設備等ハード面について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は、50%であった。教育の根幹にかかる問題点や大きな不満材料はないものの、教室設備、IT 関連備品、e-learning システムの細部に関する希望が寄せられた。

＜授業環境（運営等ソフト面）＞

本専攻の運営面等ソフト面について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生

は、41%であり、不満（1 及び 2 評価の合計）を示した学生が 27%に上っている。特に、「学生第四係」の対応に不満を抱く者が多い。また、「集中講義のスケジュール告知のタイミングが遅い」「前期に英語による応用科目開講がなく、後期に偏っている」などの不満も寄せられた。

＜教員の指導＞

本専攻の教員の指導について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は、68%であった。ポジティブな面では、具体的要望としては、「社会人向け教育に対応できる教員の増強」が示された。また、指導の質については「教員により大きな違いがある」などのコメントがあるほか、ある特定の科目について「授業の進め方や内容について再考の余地がある」という個別注文も出た。

＜総合評価＞

本専攻に在学した 2 年間の総合評価について高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は、72%であった。この二年間で得られたものとして「理論的思考」「多様性の理解」「物事の本質を見る視点」「経営全体を見て実行する力」などが上げられている。

【プロジェクト演習の評価について】

＜内容・方法・プロセス＞

当項目について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は 82%であり、高い満足度が表明された。但し、プロジェクト演習は論文作成を目的とするため、二年次の通常授業への取組がおろそかになるという意見もあった。

＜結果の出来映え（学生の判断）＞

プロジェクト演習活動及びその結果について、学生自身の高い達成度（5 及び 4 評価の合計）を認識した学生は 68%であった。

＜努力したか（学生の判断）＞

学生自身の努力度合いについて、高いレベル（5 及び 4 評価の合計）を認識した学生は 68%であった。

＜教員の指導内容、的確性、円滑性＞

当項目について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は 91%であり、高い満足度が表明された。

＜教員による対応の綿密性、丁寧さ＞

当項目について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は 91%であり、高い満足度が表明された。

＜論文審査発表会のありかた＞

当項目について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は 77%であった。学生の不満としては、「主査・副査の進め方やその場の評価にばらつきがある」「副査 1 名では客観評価は無理ではないか」などがあげられる。

＜総合評価＞

当項目について、高い満足度（5 及び 4 評価の合計）を示した学生は 86%であり、高い満足度が表明された。

② 集計結果の概観

【二年間の総合評価について】

今期（平成19年3月）に修了した学生の「修了時アンケート」結果と、前年度の修了時アンケートを比較すると次の通りである。

質 問 項 目：各項目のあとにある（ ）内は「五段階評価の 4～5 評価」を得た%を示す。		前年度 (%)
二 年 間 の 総 合 評 価	1. 教育内容は全体として期待通りであった（64%）	77
	2. カリキュラム体系は満足すべきものであった（68%）	72
	3. 教育方法は適切なものであった（59%）	84
	4. 授業環境は満足すべきものであった～教室等ハード面（50%）	43
	5. 授業環境は満足すべきものであった～運営等ソフト面（41%）	52
	6. 教員の指導は全体として充分であった（68%）	95
	7. 総合評価として二年間の就学に充分満足している（72%）	96

これによると、「二年間の総合評価」について、殆どの項目において評価が下落している。特に、「教育内容（77%→64%）」「教育方法の適切性（84%→59%）」「教員の指導（95%→68%）」「総合評価（96%→72%）」と大幅な下落が見られる。昨年度は、「授業アンケート」の結果（例：後期総合評価満足度89%）と「修了時アンケート」の満足度（96%）がともに高かったのに対して、今回は「授業アンケート」の結果（同90%）と「修了時アンケート」の就学満足度（72%）や修了時の教育内容の満足度（64%）が大きく乖離する現象が現れている。

「修了時アンケート」は、科目別アンケートではなく、在学中の総括的印象が反映されているため詳細理由は不明である。「授業アンケート」における高い満足度を示した平成19年度後学期には平成19年度修了生も在学生として「授業アンケート」の母集団として含まれているので、平成19年度修了生に特有な理由があるとも考えられないが、詳細な聞き取

り調査などを踏まえた分析が必要と考えられる。

尚、前年度修了生に対しては修了式当日にアンケートを行ったため100%の回収率が達成できたのに対し、平成19年度修了生は事前配布の任意回収方式をとったため、回収率は44%（修了生50名中22名）の低率であった。

【プロジェクト演習】

今期（平成19年3月）に修了した第四期生の「修了時アンケート」結果と、前年度の修了時アンケートを比較すると次の通りである。

質 問 項 目：各項目のあとにある（　）内は「五段階評価の 4～5 評価」を得た%を示す。		前年度 (%)
プロジェクト演習について	1.　演習内容、方法、プロセスに充分満足している（82%）	84
	2.　演習結果の出来栄えは満足すべきものである（68%）	54
	3.　演習遂行の為充分に努力した（68%）	80
	4.　指導教員の指導内容は的確であり、演習を円滑に遂行できた（91%）	93
	5.　指導教員の対応は綿密、丁寧であった（91%）	96
	6.　論文審査、発表会のあり方や結果に対して満足している（77%）	75
	7.　総合評価としてプロジェクト演習に充分満足している（86%）	80

昨年と大きく乖離した項目は「（学生の）努力レベル」である。これは、学生が自身の努力レベルを自己点検するものであるが、昨年度は 80%の学生がおおいに努力したと答えているのに対して、今年度はおおいに努力した学生の割合が 68%に下落している。一方、演習結果の出来映えの満足度は昨年に比して向上（54%→68%）している。これらの事実だけを見ると、努力せずに満足の得られる出来映えの成果物が完成したことになる。これにはいくつかの可能性があると思われる。例えば、「二年次の一般授業にもエネルギーを傾けた学生が多い」「プロジェクト演習を甘く見た学生が多い」「今年度の学生の方が、少ない努力で高い効果をあげた（e.g. 優秀性が高い、要領がよい）」などである。但し、更なる点検を行わなければ真の理由を解明することは困難であるので、今後の課題である。

以上

＜追補＞

上記、「修了時アンケート」の分析にもある通り、回収した修了時アンケートの回収率が低く（平成 19 年度修了生の 44%）、回収分だけでは充分に判断できない事項が散見されたため、平成 19 年度修了時アンケートの結果について、19 年度修了生（平成 20 年度 3 月修了）を対象とした聞き取り調査を平成 20 年 8 月に実施した。

調査内容は、①「教育内容」、「教育方法」、「教員指導」の 3 項目について、前年度に比較して大きく評価が低下したことについての意見と、②QBS の 2 年間の総合評価が前年度

修了者の満足度に比し、低下したことについての意見、更に、③特記すべき要改善点、改善提案、についての聴取であった。尚、本調査は、自由闊達な意見を促すため、教員の参加は差し控え、直接授業を担当していない専攻教育関係者をコーディネータとして行われた。同調査は、座談会形式で実施され、参加した修了生は 6 名であった。

調査に参加した修了生からは、「平成 19 年度修了生の修了時アンケート提出は任意という認識があり、改善要望を持っている者が中心に提出したのではないか。満足している者はあえて提出しなかったため、相対的に平成 18 年度より低い満足度という結果になったのではないか」という意見が出た。この意見によれば、平成 18 年度の修了生は修了式当日に全員がアンケートを記入し提出することにより、回収率 100%であり、満足度が高い学生も含めてアンケートが提出されたと推量する考え方である。また、「平成 19 年度修了生は社会で専門家（会計、ベンチャー指導等）として活動している者が多く、教育内容に厳しかったのではないか」「平成 18 年度に比べてアンケートを記入する時間が与えられた為、冷静に、厳しく書いた者が多かったのではないか」などの仮説が出た。

これらの仮説について、具体的な聞き取り調査によって検証を重ねた結果、平成 19 年度修了生としては、①「自分の専門外を体系的に学べたのが良かった」「ビジネスの世界の共通言語として経営を学び、実際のビジネスでも通用する能力を身につけることが出来た」など、QBS の 2 年間のプログラム内容に対して十分に高い満足感を有していると思われる一方、②「19 年度修了生は、（a）1 年次に交換留学が始まり、科目の配置が変わった（英語科目、会計関連科目等）、（b）予定の英語科目から日本語科目へと変更された科目があった、（c）教員退職のため、プロジェクト演習科目がひとつ減った、（d）ラウンド・テーブル・ミーティングが 1 年次に１回行われただけ」という意見が代表する如く、平成 19 年度修了生には教員の定年やプログラム改革によって、種々翻弄されたとする特殊要因が見られた。また、③改善要望点としては、「科目や教員の増強」「ケース・スタディーの改善」「一部教員の授業改善」「成績評価や予習負荷をより厳しくしてもよい」という意見が出された。

改善要望点については、アンケートに記載された内容と合致するものも多く、今後専攻内部で検討を重ねる予定であるが、中には現状の授業料水準や運営予算ではとても対応できない要望事項もあり、長期的な課題として検討を継続したい。

以上